

秋は全国各地で様々な秋祭りが催され、大勢の観客でにぎわう。また地域の人々が待ち望んだ一年で最も楽しみな行事でもある。

三戸町で開催される「三戸秋祭り」は江戸時代に始まる由緒正しき祭りである。

元々は三戸大神宮の祭礼だが、昭和42年(1967)から、同心町と六日町にある両熊野神社が加わり、



大正14年の三戸秋祭り
(三戸町立歴史民俗資料館蔵)

基本的には町内会単位などで出されるが、必ずしも町の人口規模に比例する台数が出されているとは限らない。

中核をなしていた。(以下、三戸町立図書館蔵「三戸大神宮御祭礼行列之事」より)。

まず、「鳶のもの三十人」、その後には周辺の町村から「鳥舞」、「獅々舞」、「御神楽」、「杵舞」、「駒踊」、「勸人踊」、「剣盃踊」、「太神楽」など賑やかな踊りが続く。

山車は、四輪の自動車のシャーシを利用し、2階には作り山が乗せられ、1階部分では三味線弾き・笛・

主役は何といっても町内の大店から出された九台の「屋台」(かつぎ屋台)で、

江戸時代の祭礼道具は現存しており、このうち、屋台の骨組み(文化14年1817年、制作)、山車

三戸秋祭り

相馬 英生

(県史編さん調査研究員)

三戸町立図書館

小太鼓などが置かれる。2階部分は岩山をベースに、人形・桜・藤・松・紅葉・菖蒲などが飾られる。明治期には高さを競う山車が流

げる。さらに、「男女少年の御供」が四・五十人。最後から二番目の三十九番目に「御輿」(神輿)が登場する。

代に至るまでの、山車や祭りの様子を撮影した写真も数多く残されている。

行したが、大正3年(1914)に電線が引かれ、高さが制限されると、山車の最上部を折りたたむことができる「どんでん」が発明された。

通常、神社の例大祭に行われる神輿渡御の付祭りとして、山車は運行されるが、三戸では神社行列に山車が先行する点の特徴となっている。

将来的には、歴史的な資料を活かして再現された祭りに、時を忘れ酔いしれるのも一興ではなからうか。(参考文献「八戸三戸大神宮の神輿渡御が祭礼の

一方、江戸時代は、三戸大神宮の神輿渡御が祭礼の

また、宝暦11年(1761)、町の住人から三戸大

戸市教育委員会 2002)